Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

005

最初の私立の保姆養成について（その五）

桜井女学校幼稚保育科の創立者 M・T・ツルー

小林恵子 （国立音楽大学）

はしがき

東京、青山の外人墓地に桜井女学校（現・女子学院）幼稚保育科の創立者、M・T・ツルーの墓がある。この保育科は、日本で最初の私立の保姆養成で 1884(明治17) 年創立され、幼児教育の黎明期に先駆的役割を果たした。この科を創立したツルーの保育界への貢献は高く評価すべきものがある。今回はツルーの生涯と幼児教育の分野で果たした役割を考察する。

方法としては、ツルーに関する文献や資料、とくに横浜開港資料館所蔵の米国長老派の往復書簡からツルーやメリケンの手書きの手紙を読む事に努めた。

また昨年の夏、私はツルーの生まれ育ったニューヨーク州やペンシルバニヤ州に旅し、フィラデルフィヤの長老派歴史資料館を訪ね、ツルーの手書きの往復書簡の原文に目を通し、独立戦争の記念館や自由の鐘など当時の米国の建国の歴史を訪ね、当時の開拓精神にみなぎったピューリタンの時代を振り返る事に努めた。

〔1〕ツルー (Maria T.True) の生涯

明治学院教諭、津田一路はツルーを「日本女性解放運動の先駆者」(1) と述べたが、その生涯は宣教師として日本の女子教育と伝道に大きな足跡を残した。日本に来たのは、外国伝道を志した亡き夫の遺志を継ぐためで、当時の米国は南北戦争を機として人道主義が起こり、身分や人種を越え人間の尊厳、自由、独立の精神が盛んとなり、様々な社会事業が行われた。キリスト教会ではリバイバル（信仰復活）運動が起こりアフリカや東洋の国々へ宣教師を派遣し、教育、福祉、伝道に力を注いだ。ツルーの一生は日本の女性の幸せのために捧げられたが、これは幼少期に母を亡くした事が大きな要因となっていると考えられる。

M・T・ツルーの略歴

1840	12月17日、ニューヨーク州の農家に生まれる。清教徒の家系、五人兄姉の末っ子 生まれて数年後、ペンシルバニア州に移る。
1846	母親病死。村の小学校に入学。（6歳）
1855	ツルーの教会でリバイバル起こる。
1856	小学校教師となる。（16歳）
1861	南北戦争開始　（21歳）
1865	5月16日、長老派牧師、A・ツルー（Rev. Albert True)と結婚。牧師夫人として活躍。 孤児院を訪問、アンネを養女として育てる。
1871	10月18日、ニューヨーク州エルブリッジの教会でA・ツルーが説教中に倒れ、病死。 亡き夫の志であった外国伝道を実現するためニューヨークの女子伝道学校に学ぶ。
1873	米国婦人一致外国伝道協会（Woman's Union Missionary Society）の婦人宣教師として、北京で女学校の教師を勤める。(33 歳)
1874	日本に来て、横浜のアメリカン・ミッションホーム（現・横浜共立学園）で教師となる。
1876	10月、米国長老派教会の招きに応じ、東京築地に移り、京橋教会（現・巣鴨教会）で伝道。 原女学校、新栄女学校で教師を勤める。
1879	9月、石川県中学師範学校の英語教師としてウイン宣教師一家と共に金沢に赴任。ウイン夫妻を助け、教育と伝道に励む。
1880	4月、金沢教会創立。7月、東京へ戻り、新栄女学校教師を勤める。
1881	7月、桜井女学校の創立者、桜井ちかが北海道に赴任。この学校は個人からミッションの経営となり、ツルーの手に委ねられる。 ツルーの推薦で矢嶋楫子が校長代理となる。
1883	休養のため、帰米。
1884	9月、幼児教育の専門家、ミリケンを伴い再来日。ミリケンの指導で桜井女学校付属幼稚園を充実発展させ、「幼稚保育科」を設置。
1885	7月「幼稚保育科」一回生（湯浅、古市）卒業、吉田えつ入学。(金沢、英和幼稚園保母) 八王子女学校開設。
1886	10月、ミス・ポートル、ツルーの助言で金沢に英和幼稚園（現・北陸学院短期大学第一幼

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

	稚園）を吉田えつを保母として開設。
	11月、古市静子、ツルーの援助で東京本郷に駒込幼稚園（現・うさぎ幼稚園）開設。
	12月、桜井女学校内に看護婦養成所を開設。
1887	9月、桜井女学校に二ヶ年の「高等科」開設
1888	5月、新潟県高田に高田女学校開設。
	10月、学資金のない女性のため、働きながら学べる別科（後の女子独立学校）開設。
1889	2月、栃木県に宇都宮女学校開設。
1890	9月、新栄女学校と合併「女子学院」となる
1892	新宿の角筈に衛生園と看護婦養成所設立の募金のため帰米、米国長老派教会脱退、再来日
1893	衛生園（サナトリュウム）の建設に尽力。
1895	看護婦養成所を拡張。
1896	4月18日、衛生園で病死（胃潰瘍）55歳。
1898	この頃、付属幼稚園、幼稚保育科廃止。

〔2〕ツルーと女子教育

(1)女子教育と保母の養成

「良妻賢母」を女子教育の目的とした当時の社会で、ミッション・スクールは社会的関心が高いだけに批判の的となった。宣教師について英語を学んでも現実の家庭生活では何の役にも立たず、生半可な洋風の真似をさせるだけでかえって有害であるとみられた。

こうした世間の批判に対しツルーは、より高い女子教育のありかたを求め、有用な人材を育てるため学校の内容を充実させることに力を注いだ。「女学雑誌」主催の演説会でツルーは「善良なる模範の価値」と題し「正しき働きを為す所の誠に愛すべき賢き妻となることをお望みなさい」「精神を能く磨き真に高尚なる志をお立てなさい」と述べ[2]「良妻賢母」とは異なる「自由自治」の新しい女性として世に生き、正しい働きをする賢い妻になるよう訴えた。ツルーが桜井女学校で保姆養成、看護婦養成を開始したことは女子の社会的使命を果たすに相応しい有用な人材の育成であり、日本での先駆となった。当時の保姆養成は「東京女子師範学校保姆練習科」が一回生（明治13年卒業）を世に送っただけで廃止されており、こうした時代に保姆養成を行った事は重要な意味をもっていた。

更に1887（明治20年）には従来の教育課程に加え「高等科」を設立し、幼稚園からの一貫した内容の高い学校として名を馳せ、「高等科」は女子の大学教育の先駆となった。保母の養成は高等科のなかで行われたので、知識や教養の豊かな質の高い保育者が養成され、卒業生は当時の保育界で指導的役割を果たした。

(2)ミリケン（E.P.Milliken）を招いて

創立時から同付属幼稚園は東京女子師範学校付属幼稚園を範とし、同師範学校の卒業生によって保育が行われていたが、ツルーは保育方法が米国の幼稚園と比べ、フレーベルの恩物に偏り、音楽が幼児のリズミカルな動きとかけ離れた雅楽調なのに不満を感じ、幼稚園の建物を整備拡張するとともに米国に帰り、幼児教育の専門家、ミリケンを伴い来日した。ミリケンとの関係は詳細でないが、ミリケンの父が同じ長老派の牧師でフィラデルフィヤに住んでいた事から知己だったと考えられる。ミリケンはフィラデルフィヤの公立学校及びバーミングハムの学校に学びAldine教員養成所で幼稚園の資格をとり、音楽や文学にすぐれていた。ミリケンの指導で、同付属幼稚園はこれまでの「保育唱歌」とは違ったリズミカルで軽快な米国の幼稚園の歌や遊戯が教えられ、東京女子師範学校付属幼稚園と異なった独自のキリスト教保育が行われた。これは、日本の洋楽の普及にも先駆的な役割を果たした。約50人ほどの卒業生から幼児教育の草分けとなった人材を輩出し、日本の各地で活躍した事は特筆される。

〔3〕ツルーの人格的感化と教育の姿勢

矯風会の会頭で女性解放運動の先駆となり活躍した校長の矢嶋楫子をはじめ、ツルーの人格的感化を受けた人は多い。久布白落実はツルーのことを「彼女は自ら潜んで他を立たしむる雅量が有った。そして此等凡てを包む深い信仰と愛があった」と述べている。[3]

当時の学校は寮を軸とし、教師も一つ屋根の下で生活し、ツルーも生徒と共に米をとぎ芋の皮をむき、生活の中で教育を行った。「学問も大事だけれども、デモクラチックな生活を覚える事が大事」と教えたツルーは聖書を基盤とし、各自が自由、自治の生活を身につける事を指導した。しかし健康管理、しつけは厳しく、他人への思いやりの姿勢が重視されたという。[4]

〔4〕ツルーの死と幼稚保育科の廃止

同学校幼稚保育科と幼稚園の廃止（明治31年頃）はツルーの死が最も大きな要因とされる。[5] 後に小学校も廃止されたが文部省訓令第二号で宗教教育が禁止される等、時代の流れのなかでキリスト教主義学校は大きな痛手と財政的な痛手を受けたのであった。

注 (1)白金通信161-2 明治学院 1982, (2)「女学雑誌」72号（明治20年8月20日),(3) 久布白落実著「矢嶋楫子傳」1935.161頁 , (4)「女子学院の歴史」女子学院 1985. 78-81頁, (5) 同左 237頁

NII-Electronic Library Service